

子ども会（学習会）だより

# MY SKY No. 4



1997年5月13日火曜日発行(毎週火曜日きまぐれ発行)

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責：吉成正士

「校内に落ちているゴミをどうにかできないものか??？」そう考えて、かれこれ7年目になります。板中に来た当初は、「ごみ箱の少ない学校やなあ」と思いながらも、はりきってごみ箱作りに精を出していたのですが、ここ数年ごぶさたしていました。

久しぶりに先日、瀬尾先生や岩佐先生の協力を頂いて、ごみ箱作りをしていました。といってもたいしたことをしたわけではありません。車屋さんやガソリンスタンドにお願いして集めてもらったオイル缶の底に、水抜き穴をぶち抜くだけのことです。「そんな姿をみんなはどう見るだろう……」と思って、敢えてみんなの目に触れる掃除の時間や朝の登校時に、ガンッガンッと大きな音を立てて穴をぶち抜いていました。いろんな反応があつて面白かったですよ。

① 何も気に留めず「おはようございます！」と元気に言って通り過ぎる人

② 「先生、何しよん？」と言って興味深く近寄ってくる人

③ わざと見ないようにしているのか、まっすぐ視線を保って、何も言わない人

④ 何も言わずに、納豆の糸を引くようにジト〜ツとなめるように見ていく人

ぼくの父さんは、自動車部品を作る会社で働いています。父さんは油がいつぱいの所で仕事をするため、いつも会社から帰ってくると、油のくさいにおいがします。

この前、徳島市に母さんと行く時、父さんの会社の前を通りました。そのくさい油のにおいがしたんです。その時、母さんは「くさいなあ。」とか言わなくて、ぼくに「これ父さんのにおいやな。」って言うてくれて、「父さんは今ごろここで頑張っているんだろうなあ。」って言ったんです。その時すぐ母さんが輝いて見えて、母さんがすごく好きになったんです。ぼくはそんな母さんを誇りに思うし、ぼくも差別意識がなくなったら母さんのように輝けると思うんです。

みなさんはどれにあてはまりました？中には手伝ってくれた人も、一人でしたがいまいました。いろんな反応が感じられて結構面白かったです。まっ、できることなら、あいさつくらいはしてほしかったですがね。

ところで先月末、県内の小・中・高の、私のような立場の人、つまり、同

(ある生徒の授業での発言より)



もそんなにつまらなくなってきた」と言っていました。僕は、学習会の本当の意味を知って、まだそんなに経っていません。少し自分の心の中にある、汚く醜い心に押されがちです。でも先輩や先生の話聞いていて、少し自信が湧いてきたと思うし、先輩だって「最初の方は少し恥ずかしいところがあったけど、次第に恥ずかしくもならず、自分から進んで手が挙がるようになっていた」と言っていました。僕も自分に自信を持って、差別なんか絶対に負けたくない。僕や学習会のみんなが差別にとどめを刺さなければいけないんだと考えると、少しずつだけど、自分に自信が湧いてきました。

今でも、部落差別をする汚い人間がいる。そんな人間を見返せるようにいろんなことを頑張りたいし、先生や学習会の仲間、クラスのもんなで、そんな卑屈な人間にとどめを刺したり、踏み倒していかうと思いました。僕が卒業するまでには、差別をすべてなくしてしまい、決して後輩に残したくないです。

それと、学習会が始まり、また新たな仲間ができてうれしかったです。今だけでなく、大人になっても輝いていきたいです。そして、何事にもめげず、差別やいじめをはねとばせる人間になりたいです。そのためには、その日、その日を大事にして、いろいろな学習の中で、自分に自信を持って発表できるように頑張っていきます。

今僕は、エネルギー120%満たんなので、この力を初めての全体学習で、爆発させようと思います。

頼もしい限りですね。こんな仲間に、学習会のみなさん、つながっていきませんか？そして、学習会に行っていないみなさん、各学級でつながっていきませんか？

学習会のあることがおかしんじゃないんです。どう考えたって、差別のあることがおかしんです。

では、なぜ差別が残っているのでしょうか？なぜ学習会に行けない子がいるのでしょうか？それは、「差別をなくすことは普通」という雰囲気薄いから。「学習会に行くことは普通」という雰囲気が薄いから。つまり、差別があっても別に何とも思わない人いるから。差別を許してもいいじゃないかという人いるから。無関心な自分の姿勢が原因だと感じていない人いるから。そんな冷めきった状況に、カツを入れましょう！みんながもっとイキイキした生き方ができるように、「私が」変えていきましょう！

全体学習ガンバロウ！！





今週の日程に関して、それぞれにメッセージを……。

【学習会のみなさんへ】

今週火曜日から、学習会が始まります。時間に遅れないように行って、時間いっぱい頑張りましょう！！

【学習会1年生のみなさんへ】

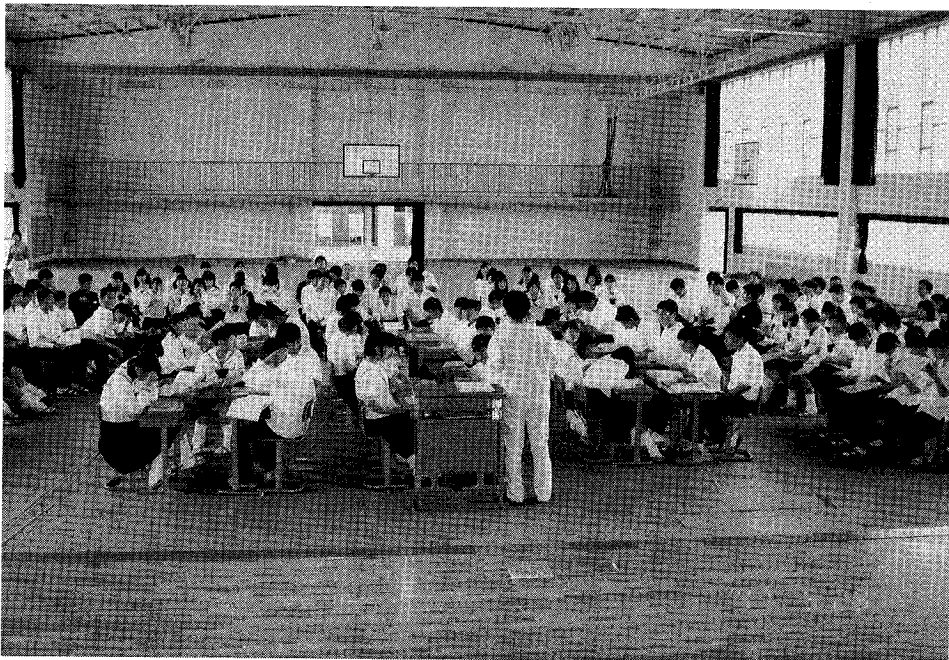
15日の全体学習に向けて、火曜日5：30から総合センターで学習を深める予定です。できるだけ多くの方でその絆を確かにおきたいと思えます。頑張りましょう！！

【学習会保護者のみなさまへ】

学年別の保護者会が、下記の日程であります。忙しく、かつお疲れのところとは思いますが、子どもの成長のため、また我々自身の成長のため、集いましょう！！

★☆☆ ★★★ ☆☆☆ ★★★★★ ☆☆☆ ★

- 5月14日(水) 第2学年学習会保護者会(19:30～；板野中学校会議室)
- 15日(木) 1年A組学年全体学習(第1学年第1回資料「学習会の仲間」)
- 16日(金) 第3学年学習会保護者会(19:30～；板野中学校会議室)
- 23日(金) 板野中学校体育祭
- 28日(水) 中間テスト
- 29日(木) 3年C組学年全体学習(第3学年第1回資料「ある日の生活ノートより」)



第3学年第1回全体学習 (C組5校時) 三木教諭 (97. 5. 29)

今日、同和教育問題が大きな歴史の転換点に立っている。それは、地対財特法が期限切れになり、これまで二十八年間にわたって行われてきた特別措置法による行政が一般対策の方向に移行するということだけではない。

歴史の転換点に立つとは何か。まず結論をひとこと言え、地域改善という発想から脱皮し、同和教育を人権問題という本質から捉え直すということ、それは国民一人ひとりの課題、つまり自分自身の課題として問い直すということである。

そこに差別される対象があるから差別があり、人権問題があるわけではない。差別というものは、差別される側の問題というより、むしろ差別する側の問題である。女性問題は男性問題、障害者問題は健全者問題、外国人問題は日本人自身の問題にいじめは普通の子の問題であり、大人の問題であるという現実が大切と思う。

私も委員を務める地域改善対策協議会は昨年五月の意見具申で、二十一世紀を人権の世紀と位置づけ「国際社会におけるわが国の果たすべき役割からすれば、まず足元の国内において、同和教育など様々な人権問題を一日も早く解決することは国際的責務である」と提言した。

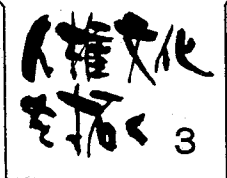
人類は今世紀に二つの大罪を犯した。一つは戦争による平和の破壊であり、もう一つは開発の名による環境の破壊である。その高い代償を払って、われわれが学んだこ

とは、人権こそ平和の基礎であり、自然との共生こそ人間の幸せにつながるという理念である。人類の普遍的価値として人権と環境が二十一世紀のキーワードになる。しかも、この人権と環境は一つのものである。平和はいくら声を大にしてお題目を唱えても実現しない。世界中の誰もが、どこでも、いつでも、人権を尊重するという極めて当たり前のことを日常生活で実践していく、それが私たちが平和を手にする一番の近道で確実な方法だと信じる。

一九九五年秋、北九州市で人権問題の国際シンポジウムが開かれ、ドイツとオーストリアの学者が参加した。私が一番関心を持ったのは人権問題の権威である外国の学者が同和教育をどう表現するかということだった。二人は「ドゥワ・プロブレム」「ブラック・プロブレム」と言った。外国語に訳す言葉がないのである。外国人にとって日本の部落差別は、訳す言葉もないほど、まことにけつたいな、理解に苦しむ問題なのである。差別や偏見の根源は、異質性を認めず、

# 歴史の転換点に立つとは何か

稲積謙次郎



違いによって相手の人格にまでレッテルを張り、差別することだ。人種差別、女性差別、障害者差別、いずれもそうである。私たちが外国人の学者に「なぜ日本の同和教育は外国人の人々にわからないのか」と質問したら、逆に聞かれた。「ミスター・イナツミ、あなたと部落の人と、どこが、どう違うのか」と。

まさに、部落差別は政治的・社会的に、つくりだされた異質性による差別なのである。現在、子ども社会で起きている弱者いじめも同根だ。いじめの口実は何でもいい。また弱者がより弱者を差別する構造も同じである。つくられた異質性による差別というものがあ

る以上、たとえ部落差別やいじめが解決されても、将来どんな差別によって、私たち自身、あるいは愛する子や孫がその被害者にならないという保証はない。地対協意見具申で「同和教育は過去の課題ではない。この問題の解決をあらゆる差別の解決につなげていくという未来志向で考えよう」と強調したのも、その意味である。

いまほど「人権」が流行語になっているのではない。「同和」はアレルギーがあるから

耳ざわりのよい「人権」に置き換えた方がよいという風潮すら見られる。これは大変なごまかしであり、動機において不純である。これを私は人権オブラート論と呼んでいる。一方で「人権」と言うと、同和教育が薄められてしまうと危惧するむきもある。これも、あまりにも消極的な考えではないだろうか。

私は「人権」と「同和」は同心円の関係にあると言ってきた。もちろん、同和教育は日本の人権問題の重要な柱として位置づけねばならないのは当然である。同時に、外国人差別、障害者差別、女性差別、いじめなど、あらゆる差別をきちんと人権という同心円の中に位置づける必要がある。差別の痛みに軽重をつけて論じることが人間に対する冒とくであろう。

個別の問題に対するアプローチの違いはあるにせよ、同和教育の解決をあらゆる差別の解決につなげていくならあらゆる差別を解決する中で同和教育を解決していく、という取り組みの構築が今後の大きな課題ではないかと考える。

(いなづみけんじろう・西日本新聞顧問)

